ICHIGAYA INNOVATION DAYS
共につくる社会を考える2日間
2024.11.15▸16

ICHIGAYA INNOVATION DAYS

共につくる社会を
考える２日間

デザイン・人・組織の視点で
社会価値の共創を探求する

武蔵野美術大学ソーシャルクリエイティブ研究所は、2022 年より株式会社日本総合研究所と共同研究を進めてまいりました。「ICHIGAYA INNOVATION DAYS」は、デザインの力を使った美大ならではの課題解決の方法を探究する武蔵野美術大学の取り組みや、シンクタンクとして社会課題の解決を実践してきた日本総研のプロジェクト活動を紹介するとともに、両者が 2022 年から行っている共同研究と実践の成果を発表するものです。初開催となる今回は、「共につくる社会を考える 2 日間」と題して、デザイン、人、組織の視点から社会価値共創に向けたさまざまな研究・実践について、トークセッションや展示、ワークショップを通じて紹介します。

自分が描く未来のイメージを、事業の仕組みに乗せて世の中に届ける

丸山 幸伸
武蔵野美術大学クリエイティブイノベーション学科
日立製作所研究開発グループ

2024 年春からスタートした「武蔵野美術大学実験区」は、美大生が描く世界を実現させるために、クリエイティブとビジネスという手法でアプローチする創業支援プログラムである。ここでは日立製作所研究開発グループ主管デザイン長であり、武蔵野美術大学クリエイティブイノベーション学科教授の丸山幸伸から、「美大にしかできない創業の場をつくるには?」をテーマに話を伺った。（モデレーター：酒井博基・武蔵野美術大学創業支援プログラムディレクター）

まずは“なにを問うか”を丁寧に温める

酒井：“実験区”と呼ばれるにふさわしい場をつくっていくためには、美大のなかだけに閉じてしまうのではなく、企業や他大学など外部との連携が不可欠です。長らく企業でデザインに携わり、現在はムサビで造形構想学部クリエイティブイノベーション学科の教授を務めている丸山さんには、「武蔵野美術大学実験区」の構想が生まれた当初からいろいろなご意見をいただいてきました。今日は、あらためて丸山さんの視点からこのプログラムについてお話を伺っていきたいと思います。まず、このトークイベントのテーマ「美大にしかできない創業の場をつくるには?」に対する第一印象をお聞かせください。

丸山：まずこのプログラムは、「美大にしかできない」ものというよりは「美大がやらなければならない」ものという印象です。次の社会をつくる新事業に対して美大がなにをやるべきかを考えるのが、このトークイベントの目的でもあるのだろうなと捉えました。
いきなり細かい話になりますが、これまで企業などで実施されてきた新事業創成のスキームは、新事業のアイデアを持つ人が集められ、そこにメンターやプログラムを運営する教育コンサルタントが参加し、アイデアを一生懸命磨き込んで世の中に届けるというものだったと思います。それはそれで正しいと思うのですが、僕はそれよりも、“なにを問うか”が非常に大事だと思うんです。問いというものはすごく小さな好奇心から始まっていたりするので、それをどういうふうにカタチづくることを支えていくかがポイントになると以前から思っていました。
なので、社会の小さな違和感に気づけるような教育を受けてきた美大の学生がなにか好奇心を抱き、事業の入口になるような構想をつくることさえできれば、そのあと磨くに値するものになるだろうと。今回、プログラムの流れをふたつのフェーズに分けていると思いますが、前半のビジネスデザインアワード※の部分にこそ美大らしさが現れてくるはずです。

※「MAU SOCIAL IMPACT AWARD」は、「武蔵野美術大学実験区」から生まれた、社会にインパクトを与えるような、新たな事業を創り出す美大生を発掘することを目的としたビジネスデザインアワード。詳細は巻末の web サイトをご参照ください。

酒井：新事業創出においては、事業アイデアの“how”の部分から入り、アイデアを叩いて強くしていくようなやり方が多かったなかで、武蔵野美術大学実験区ではまずは“なにを問うか”をしっかりと丁寧に温めると。

丸山：いまの時代はとても不確実で、1 年、2 年先を見通すのも難しい。そんな状況のなかで新しいことを考えるのって、簡単じゃないと思うんですよね。そうなると“Why”のところ、つまり、まず社会の変化に気がついて、その根源に向き合わないといけない。しかし、それに気がつくこと自体が難しいうえに、気がついたことってとても脆くてやわらかいものなので、ビジネスエリートのメンターや教育コンサルタントが磨くには不十分な固さなんですよね。それを磨きに耐えうるレベルまで持っていくためにはかなり丁寧な仕事が必要なのに、残念ながらいままではそういう状態を支える受け皿が存在していませんでした。
だから武蔵野美術大学実験区で学生に対してやるべきなのは、事業の実現性や実行性を鍛え込んでいくのではなく、問いが示されたときに、批評的な態度で“why”の部分への自信を育ててあげることだと思うんです。「あなたはこっちだと言っているけれど、こういう面もあるんじゃないか」と提示しながら、彫刻作品をいろんな角度から眺めるように“why”を形成していければいいのではないでしょうか。

酒井：「批評的な態度」というのはキーワードになりそうですね。美大の授業の大きな特徴のひとつに、講評会というものがあります。みんなの前で、自分の作品がさまざまな教授陣により批評的な目にさらされる機会であり、メンタルも非常に鍛え上げられます。しかも、A 先生と B 先生がそれぞれまったく矛盾するようなことを熱弁したりする。答えを求めるような教育では絶対にあり得ないことですよね。

丸山：私はムサビの市ヶ谷のキャンパスで教えていますが、学生が最初のうちなにがつらいかって、先生は答えを教えてくれないなかで、講評会で言われるさまざまなことを自分で判断しなければいけないことです。ほかの専門領域で教育を受けてきた人にとっては、文化が違いすぎてすごく戸惑うと思います。特に、社会人大学院生や他大学から編入してきた学生は苦労しているように感じますね。
工学部や経営学部では、選択肢を設けてロジカルに判断していくディシジョン・メイキング（意思決定）の態度が求められます。いわば、目の前にあるもののなかから、自分にとって有益だったり意味のあるものを絞っていくという形です。一方でデザイン学部や人文社会科学部では、「世の中は常に変化しているんだから、まずは現場の実態を見に行こう」という態度で対象を見ている気がします。美大生はいまの時代の気分に合っているかとか、“相応しさ”にすごく寄り添ってものを考えるじゃないですか。工学では“最適解”があるはずだという前提になっていて、さらに最適解があるというのは、対象が時間的に動かないという、外乱がないことが前提になっているからだと思います。

酒井：丸山さんがおっしゃっていたように、いまは変化の時代ですよね。そのなかで“how”の部分から入るビジネスは、最適解があると信じて動くという強さがある一方で、ルールが変わるとまったく対応できないという脆さも持っている。なので、世の中は動いているという態度で対象を見ていくというのは、これからの時代のビジネスを考えていくうえでは重要だと感じました。

美大生の“無限に掘り下げていく”ところを活かしてほしい

酒井：丸山さんは、美大生の創業やスタートアップがどのような可能性を持つとお考えですか？

丸山：ビジネスすらデザインやアートの対象物だと捉えてもらえれば、従来の新事業のように「こういうニーズや趣向を持った人に合うマーケットをとる」というような対象を観る解像度が低い描き方ではなく、ビジネスで提供される価値について、かなり細かな“人の暮らし”まで目がいくと思います。美大生は、ファインアートかデザインかにかかわらず“まだそこにありもしないのに、ものすごく細かいところまでわかって作品をつくっている”じゃないですか。ああいうことを、プログラムの初期段階にやってくれることを期待しています。それができると、ビジネスを通して実現したい世界が最初に定義されるので、事業化に進んだときに想定していたやり方がダメになっても別のやり方にシフトしやすくなります。

酒井：なるほど、そういったところにはたしかに可能性がありますね。一方で、美大生の創業の課題についてはどうお考えですか？

丸山：半分冗談、半分本気で言うと、朝起きられない人がたくさんいることでしょうか（笑）。でも実は、それには別の側面があります。美大生って、なにかをデザインしてもらう、もしくは作品をつくってもらうと、みんな無限に掘り下げていくんですよね。それは、時間をかけるほど、たくさん迷うほど、クオリティが確実に高まっていくからです。そうした人が創業しようとしたときに、たとえば事業プランも練れば練るほどよくなっていくわけですから、止められなくなるんですよね。そうすると期日に間に合わなくなったり、果てに朝起きられなくなったりするということです。
美大ではない他大学の学生や企業と一緒に進めていくフェーズに入ると、今度は計画的に工程を管理していくことが必要になります。そのとき美大生は、段取りを考えても、心のなかでは「やってみなければわからないと」思うはずです。最後までアウトプットにこだわるのは本来、エンジニアもそうだとは思いますが、特に美大生は、自分の美意識が満足するまで人に見せない、できたと言わない。そうするとプロジェクトマネージャー役の人は何度も工程を引き直さざるを得なくなる。そこで絶対に揉めると思います。そこが美大

生の最大の魅力であり、リスクですよね。
それから、意外だと感じる人もいるかもしれませんが、美大生はけっこう哲学的なところがあります。事業化を進めるなかでも、やっているうちにその課題の本質に気がついてしまうと、プロジェクトの後半になってから違うことを言い出してそっちを追究したくなってしまう、なんていうこともあると思います。クリエイターとしてひとりでやるのであれば自分のリスクとして処理すればいいのですが、チームで動くときには、なによりもそこを共有することが大切ですよね。自分ひとりが“見えてしまった”ものをきちんとアウトプットして共有しないと、プロジェクトは進みません。

酒井：ビジネスをつくっていくうえでは、いろんな人を巻き込み、そして共有していくというプロセスはすごく大事ですよね。ところで、ムサビやほかの美大の卒業・修了制作展を観ると、多種多様な興味関心をよくこのアウトプットに結びつけるなあと、毎年身が引き締まるような気持ちになるんですが、その反面、キャリアという面では意外とふつうの進路を選ぶケースが多いなと。グラフィックデザイナーや web デザイナー、プロダクトデザイナーといった職種に対して自分を適応させていく人が多いことが、ずっと気になっているんです。学生時代にすごくおもしろいものをつくっていたのに、キャリアさえもデザインしていく、つまり自分でビジネスモデルをつくってそれを世に問う選択をする人は少ない。
一方で、ムサビの進路選択の割合は他大学とは圧倒的に異なります。就職希望が約 6 割、進学希望が約 1 割、残りが作家やフリーランスや起業という、要は「その他」の分類です。それが約 3 割を占めているのは大きな特徴なのではないでしょうか。
武蔵野美術大学実験区を通してその割合を増やしたいというわけではないのですが、その 3 割の内訳が、就職という道を選択しなかった結果そうなったのか、ポジティブに戦略を持って作家やフリーランスを目指しているのかは気になるところです。
そのような状況があるなかで、こういうプログラムをムサビに埋め込むことによって、そこから新しいムーブメントやカルチャーが生まれてくるといいなと。丸山さんはそれについてどう感じますか？

丸山：たとえばデザインの仕事がしたいと考えたら、いままでは商品やサービスを提供して収益を上げるような会社にデザイナーとして関わる人が多かったと思うんですね。そして自分の考えた新しいイメージを、商品やサービスを通じてお客様に届けていた。これからは商品やサービスだけではなく、自分が考えた未来の社会の仕組みや仕掛け、地域の人々が触れ合うイメージを、事業の仕組みに乗せて世の中に届けたらいいんじゃないかと思うんです。そうすると、自分の作家性やデザインとしてのメッセージをより遠くに、かつ多くの人に届けられるわけですから、進路選択の割合も変わってくるんじゃないかと思いました。

美大、他大学、企業…
さまざまな人を巻き込むことの意義

酒井：ここからはプログラムの中身についても触れていきたいと思います。まず、美大生の特徴をうまく活かすにはそれぞれのフェーズで工夫が必要だと思いますが、成功の鍵を握るのはどのようなところにあるのかなと。そういえば以前「ビジネスデザインアワードへエントリーする際にエントリーシートを書いてもらうんです」と丸山さんに説明したとき、最初はそんなことさせちゃダメだとおっしゃっていましたよね。たしかにこういうものでエントリーシートを書くのは掟破りですが、そうしないと絞り込めないんです。

丸山：そうなんですよね。まずは美大生が世の中のなにに気づいているのか、なにに違和感を持っているのかに耳を傾けようじゃないかと。その段階なしに先へ進めないし、「その気づきは、たしかにいままでなかったよね」という角度のアイデアがほしいと思っています。それこそが、未来をつくるための光になる。むしろ、この時点で言語にできるようなものだったら、あんまり新しくないんだと思うんですよね。
そうやって言葉にできないものをエントリーで見せてくれたら、次にそれを形にしてもらう。僕らは別にプロトタイプが見たいわけではなく、build to think、つまり“考えるためにつくる”ことをしてほしいんです。美大生がもやもやと考えている気づきをなにか形にしてもらい、僕らも「ああ、そういうことだったんだ」と気づきを得て、それはぜひ事業にしてみようと思えれば、受賞につながってくるんじゃないでしょうか。

酒井：一次選考は、全 2 回のワークショップ形式になっています。つまり思いの丈を目に見える形にして表現してもらうと。そこでさらに絞り込んで最終選考のプレゼンに進むという流れです。
ひとつ特徴的なのは、エントリーは他大学の学生も OK、そして年齢制限もとっぱらって社会人も OK としているところです。いろんな人たちを混ぜていきたい。というのも、美大生と一緒に起業したいというニーズはけっこうあるんじゃないかと考えたんです。そういうふうにしてチームを組成していくなかで、チームに美大生がいることの意義についてはどう思いますか？

丸山：繰り返しになりますが、かなり初期の段階から構想の解像度が上がると思うんですよね。最初につくりたい世界がはっきりするので、みんなで納得しながら「俺たちはこれをやらなきゃいけないんだ」という使命感に突き動かされて進む。そんなことができるんじゃないかと思います。
以前、あるプログラムで工学系の学生と美大生の混成チームで、地域コミュニティのつながりを活性化するテーマについて考えようというものがありました。そのときにおもしろいなと思ったのが、工学系の学生が「地域の人たちが密に付き合えていないならば、もっと接点を増やすアイデアを出そう」という目標を定めて意欲的に進めていくなか、美大の学生はそのなかで「なんだかおもしろくないな」という気持ちになっちゃったみたいで。
1 対 1 で話を聞くと、いまの時代に地元の人たちが直接交流する機会を増やしたところで本当にうまくいくのか、そこに対して説得できるほどの論も組み立たず、ひとりでモヤモヤを抱えていたらしいのです。その美大生と雑談を続けていると、「ペットを挟んだコミュニケーションならありえそうだね」という会話になりました。でも、それを聞いた工学系の学生は、「前提が違くない？」「いままでやってきたことはどうなるの？」と困惑してしまったそうです。美大生と他の混成チームだと、そういうことが起こりがちだと思うんです。でも、それこそが“what”を“why”から問い直していくことの真骨頂なので、一般大の方は、前提を疑うようなことがどういう局面で起こってくるのかを、スリルとして楽しむことができるはずです。
社会人の方については、私の知人たちからも聞くのですが、コロナ禍の経験を経て「社会は変わっていくのに自分はこのままでいいんだろうか」「もっと社会に直接貢献するような活動がしたい」と、会社のなかで鬱々としている人が増えていたりするんですよね。そういう人たちが、まさに世の中に問い直すようなテーマに授業やプロジェクトで取り組んでいる学生たちと一緒に考え、社会のなかで自己効力感を覚えるような体験をしていただきたい。ぜひ肩書きの殻をはずして、クリエイティビティを解き放ってもらいたいです。

酒井：たしかにそうですね。その感覚って、社会人だけではなく美大生にもおこっているような気がします。今年の卒業制作展を見て感じた傾向は、「社会課題の解決をテーマにしています」とあえて謳うようなものが減っていることです。そのぶん「いま目の前にいる、この人の力になりたい」というような、すごく個人的で解像度がはっきりしているものが増えたなと。そこにいろんな可能性が秘められていると感じました。

丸山：卒業制作の内容が身近なものになったというのは、デザインが、美大やクリエイティブ業界のものから、さまざまな分野で新しいものを生み出す活動に使えるものになってきたことがあるんだろうなと思います。一方でこのプログラムでは、広がりを見せるデザイン活動のなかにおいても、美大生らしく、コモディティ化（※）しないやり方で突き進むようなアイデアを期待しています。

酒井：もうひとつ、インキュベーション施設やスタートアップ施設に入っているような方たちにもぜひチャレンジしてほしいと思います。

丸山：さまざまなスタートアップ施設のイノベーションの形を見てると、それぞれ特徴を出していくことは大事だと思いますが、いま我々が向き合おうとしている社会は非常に複雑。ですからその解決策を包括的に考え、互いの施設が持っている人的資源やケーパビリティ（才能や能力）を連携させるべきだと思うんですよね。ビジネスデザインアワードのところでは一緒に卵を温め孵化させる場所として存在し、アクセラプログラム以降では、テーマをヒナから一人前に育てていくのに適したプログラムをもつ施設の人に連携してもらうのもありかなと思います。

酒井：最後の質問です。このプログラムを進めていくうえで、メンターによるメンタリングであったり、おそらく企業との事業協創や共同研究をしていくこともあると思うんですが、そのときの企業の関わり方の可能性にはどのようなものがあるでしょうか？

丸山：事業とはいうものの、出てくるものは“大きな夢のための一歩目”のような位置づけのテーマになると思うんですよね。なので、企業の方に関わっていただくときには、その大きな構想に共感したうえで、自社事業としてメリットがある別のアプローチを見出せたのなら、それを議論して新たに一緒に組んでいただいてもいいと思っています。ここで出されたものを全部事業化しないといけないとは思ってほしくないなと。アイデアを技術で支える立場として参加していただくのもいいですし、これを引き取るんだというよりは、アイデアにインスパイアされて一緒にやろうみたいな感じがいいのではないでしょうか。事業化としては歩みは遅いかもしれませんが、委託研究というよりは、共同で一緒に考えるようなプロジェクトが立ち上がるのもおもしろいなと考えています。

沢山の人達が参加する多声の未来をつくるデザイン

自治体・行政主体での地域を盛り上げるイベントや活動は多々あるが、盛り上がるのは一部の人だけという状況になりがちだ。地域に住む住民全員が十全的に参加することは果たして可能なのだろうか？ ここでは2022 年から開始した武蔵野美術大学と日本総合研究所の共同研究（通称：Convivi）を先導する武蔵野美術大学ソーシャルクリエイティブ研究所・若杉浩一と、株式会社日本総合研究所・井上岳一が、自律協生社会の実現に向けた課題を語り合う。

井上：この 2 年間、自律協生をテーマに共同研究に取り組んできました。自律性や主体性という言葉が、最初からキーワードとしてあったのですが、これが一筋縄ではいかない。例えば、社員の自律や主体性を謳う企業がありますが、そういう企業でも、方針や戦略は一部の人たちが決めている。意思決定には参加できないのに、自律的・主体的に動けと言われるわけです。一方で、自治組織である自治会に、今、積極的に参加する人はいない。皆、致し方なく参加している。自治の基本は自律性や主体性だと思うけれど、今の自治会はほど遠い。

若杉：この前、「宴のデザイン」をやりましたよね。あれは、どういうお客さん来るかわからないけど、見えない何者かに向かって喜んでもらうイメージを持ちながら、主体的に動くということじゃないですか？そこには、立場の上下もなければ、何かある一つのゴールもなく、しかも対価があるわけでもない。でもそれで、働いている人もそんなに働いてない人も、関わった人全員が喜び合うという現象が起きていて、あれはプリミティブだけど、みんなが主体的に参加する喜びがあるなと思います。

井上：確かに、宴をつくることに対し、全員が自ら役割を見つけて参加し、力を合わせていましたね。地域の祭りにも似た構造がありますが、企業組織においてはそういう場面は少ないように感じます。それはどうしてだろう？

若杉：企業の場合、ミッションそのものが経済由来で、ノルマや義務が発生しているからじゃないですかね。夢や希望とかではなく、売上ノルマとか、達成要件みたいなものに縛られていくわけですよね。天草に移住した卒業生の一人が、「見えない誰かのために手間暇かけて何かを用意するということは地域の人には当たり前な行為なんだけど、それが地域を豊かにしているのかもしれない」と言っていました。豊かな場をつくるのは、経済に由来しない主体的な行為なのではないでしょうか。

井上：以前は「仕事」だった宴の準備が、来てくれる人を喜ばせるために何ができるかを考えるという意識になってから、学生達が明確に主体的になりましたよね。

若杉：宴の夢や希望、喜びみたいなものが具体的な像として現れると、その主体性が発揮される。同じ現象ですら、みんなが主体的に参加するか業務になるかって分かれるんだなって思いましたよ。そう考えると、経済を行動原理とする企業が掲げるビジョンは、果たして社員の主体的参加を促すのか、という問いが生まれますね。

井上：企業の場合、命令された業務をやるだけでは主体的な参加意識を持てないから、ミッションとかビジョンとかパーパスとかを定め、「我々が向かうのはこういう先であって、決して金儲けのためにやっているのではない」という物語をつくるわけですよね。そして動画なんかで共感を演出しながら同調圧力もかけつつ、ミッションやビジョンを浸透させていく。そんな七面倒くさいことしなくても、地域の場合、「見えない誰かに喜んでもらうために手間暇かけて用意する」ということが自然に、それこそ自律的・主体的に生まれてくる。この違いは何なんでしょうね？

若杉：誰かが喜んでくれるという共通体験が、その場や地域に確かに存在しているから、自分もやるのが当たり前だっていう気持ちが湧くんでしょうね。だから企業の人たちも自分たちでつくり上げた喜びや希望みたいな共通体験が、自分達の組織のなかにあるかが重要だと思います。みんなで「よかったね」って言い合える体験って、おそらく大学でも芸祭ぐらいしかないんじゃないかな。企業にはお祭なんかないからね。

井上：いろんなものが溶け合って、みんなが多幸感に満ちていたという記憶、そういう場が立ち上がっていたという感覚を経験することが、主体的な参加を促すのですかね。

若杉：北海道森町で僕らがやってきた地域の人の集い「オニウシ変態解放区」もそうですが、まさしく自己効力感が湧き起こるってことですね。お互いを高め、話を聞き、見ず知らずの人たちが共に何かを語り始めるんです。あの場所では、同業者では話せないことを話せる。そこで自分の話が誰かの役に立つことによって自分の役割を認識する。それぞれ大なり小なり自分の役割があって認め合い高め合い、何かの実験を繰り返すというような集合体があの場にはあるわけですよね。そういう場を、果たして組織や大学の中で持てるのか、社会の中で存在するのかということを問い直さなきゃいけない。

井上：サイズの問題もあるような気がします。「場」ってある一定のサイズを超えちゃうと立ち上がらなくないですか？霊長類学の山極壽一先生に市ヶ谷に来て頂いた時、言葉を用いずに身体的に共鳴できるのは 150 人までだと言っていましたよね。そのサイズを超えてコミュニケーションできるように人間が開発したのが言葉だというのが山極先生の解釈です。ミッションステートメントのような言葉に頼って場を立ち上げてようとしてもなかなか難しいことを考えると、やっぱり 150 人ぐらいを基本単位にするのではないでしょうか。

若杉：ある種の集団のなかで、自分の存在が認められて共感できるユニットサイズが 150 人 だとしても、その 150 人 が多様に関係して、そこに自分の居所が複数存在するようにしないといけないですね。だけど残念ながら今はそういう複数の居場所を持てない息苦しさがあるじゃないですか。だから自分が認められる第 2、第 3 の小さなコミュニティが社会の中で必要なんだろうと思います。一つが駄目になると居場所がなくなるという状況が、不登校とか、社会参画しない引きこもりの人たちを生み出しているのだと思います。

井上：日本社会の問題は同質化の圧力が強いことですよね。同質化に抗えるという安心感がないと、150 人というサイズの集団は息苦しくて辛くなってしまう。

若杉：そう、近代で起こったことは同質化によって社会システムを支えるということじゃないですか。だけどそれも行き詰まり始めていて、同質化に馴染めない人たちの存在を、社会がどう居場所をつくり、活躍してもらう新しい枠組みをつくるのか、これが課題です。

井上：それには社会システムをどう多様性に開かれたものにデザインし直すかということと、個人が同質化の圧力から逃れて、どう自分の居場所をつくり出していくのかということとの二つのアプローチがあるのでしょうね。後者においては、美大が追求してきた個による表現のスキルが武器になり得るのではないでしょうか。

若杉：仰る通りなんですが、同質化に対して人間が素直に抗えるかというのはもうずっと近代哲学で問われてきた話で、どうしても人間は大きなものに巻かれて、思考を放棄しがちじゃないですか？

井上：世の中に抗って生きるためには「どんな自分でも生きていける」という安心感が必要ですよね。安心感がないところで自分を表現して生きるのは難しいですから。そのことについては、産学（「産学プロジェクト実践演習」のこと。9 ～ 10 月の一ヶ月間、学生が地域に入り浸り、現地の課題探索と課題解決を行う実践的演習）で宮崎県美郷町に行った T 君の話が印象的でした。彼は話すことに苦手意識を持っていて、東京では人と話せなかったのに、美郷町では初めて出会った人の家にあがりこんで何時間も話し込んだり、集落の飲み会で皆の前で歌を歌ったり、東京にいた時には考えられない行動をしていた。どうしてそうなれたのかを聞いたら、東京では、失敗が怖くて話せなかったけれど、美郷では怖さを感じなくて、気づいたら自然に話していたと言うんです。それで、自分は話すのが苦手なんじゃなくて、ただ失敗を怖がって踏み出していなかっただけなんだと気づいたとも言っていました。その話を聞いて、はっとしたんですよね。T 君にとっての東京はある意味、自己責任が貫徹した世界です。個はバラバラに存在していて、自分の責任は自分で取らないといけない。それが自由だと思う人もいるのだろうけれど、T 君のように身がすくんで動けなくなってしまう人もいる。自己責任の意識が強い世界では主体性を言いすぎると、かえって人は動けなくなってしまうんです。それに対し、美郷町では個は関係に包摂される。〈あなた〉と〈わたし〉の境界は不明瞭で、それは、國分功一郎が言うところの能動態（主体）でも受動態（客体）でもない中動態的な世界です。中動態的な世界では個は責任の主体にならないから、

オニウシ変態解放区：北海道・森町で毎月行われている業種を横断した交流会。「オニウシ」とはアイヌ語で森（樹木の多くあるところ）を意味する。

個人は安心して自律的・主体的に振る舞える。つまり、主客が曖昧で、主体の責任が問われない中動態的な世界のほうが自律性や主体性が立ち上がりやすいという逆説がある。個人として認められながらも、個として切り離されず、失敗しようが何しようが存在していて良いんだという安心感を与えてくれるような包摂。自律性や主体性が芽吹くには、そういう土壌が必要なのでしょうね。

若杉：僕も知識とか立場とかでの共感じゃなくて、一人の人間としての存在を許されるような場所があるかということが重要な気がしています。表面的ではなく、深いところまで共感を得られる場所が社会には少なくなっているんでしょうね。地域にはまだそういった風土があるから、学生の心がほぐれていくんでしょうね。

井上：「包摂」というと聞こえはいいけど、一方で、個人の自由を抑圧し兼ねない側面もありますね。それが嫌でムラを飛び出していった人たちがつくったのが今の都市です。確かに自由は謳歌できたかもしれないけれど、包摂がなく安心感のない社会しかつくれていない。

若杉：東京と地域という極端なコミュニティのばらつきがあり、社会的にさまざまな居場所の可能性が出てくる時代のことを考えると、このあわいがどう存在するのかということをお互い考え合う時代にきているのかもしれません。

井上：その時、人口減少はある意味、希望になります。西会津に暮らす友人と話していたんですが、これまでは若い世代のやることに反対ばかりして足を引っ張ってきた年長世代が、最近、かなり態度が変わって、一緒に取り組んでくれるようになったと言うんです。きっかけは、戸別の世帯動向のデータをとり、グラフにして、「このままだと 10 年後にはこの村に人がいなくなるよ。500 年続いた村をあんた達が絶やすことになるけれど、それでもいいんだよね？」と突き付けたことだそうです。そのデータを見て、さすがにご先祖に申し訳が立たないと年長者達が言い出して、若い世代と協力して何とか状況を変えていこうと動き始めたのだそうです。村が滅ぶという危機を共有することで、頑なだった上の世代がようやく心をほぐして協力してくれるようになった。

若杉：ムサビが産学でお世話になっている地域でも、ちょっと前だったら考えられないくらい頑固で地区同士の対立関係もあってなかなか新しいものを受け入れられなかったのに、人口減少により、新しいものを受け入れないかぎり未来が変わらないという共通の意識がでてきたというところがあります。そういう意味では、井上さんが言うように人口減少がある種の希望をもたらすのかもしれません。

井上：日本企業の多くが変われないのは、本質的に危機感がないからです。「自分達の代はまだやっていける」と意思決定層の人たちが心の底では思っているから、変われないですよね。僕らは地域を活動の舞台にしていますが、根本的な問題意識は、一人ひとりが生き生きと生きられる社会にどうしたらシフトできるのかというところにあります。その時に、「まだやっていける」という安心感がある都市や組織とやっていても変化はつくれない。できるだけ端っこの場所、人口減少や産業衰退が待ったなしの場所のほうが、変化に柔軟だと思うから、熊本県の天草市や北海道の森町を拠点に活動しているんです。

若杉：そうですよね。学生たちが自分のホームである東京を捨て、地域で活躍し始めているのは、自分達の存在や未来が発揮できる社会がそこにあると感じているからでしょう。

井上：共に社会をつくりなおしていく場にいられるということに、若い世代がクリエイティビティと楽しさを感じ始めている。みんなでつくるのは面倒くさいこともたくさんあるんだけど、それ以上に共につくる喜びを味わえる。そのことが大きいのではないでしょうか。

若杉：学生だけじゃなくて、企業の人たちとかさまざまな人たちが参加し活躍する場があるという意味では、新しい学びのフィールドの可能性が地域にはありますね。

井上：自律性や主体性を促す学びのフィールドになりそうですね。もう一つ気になっているのが、スケールの問題です。50 人に満たないような小さな集団で宴をやるとすごく盛り上がるし、このメンバーとなら一緒に何かをつくれるという実感はつくれるけれど、それはスケールするのか、つまり特定の小さな集団だけではなく、その地域や自治体の全域、或いは他の地域の変化にどう接続していけるのか。デザインの問題として考えた時にどうですか？

若杉：それは、僕らの活動そのものなんですけど、大きな仕組みによらないチームづくり、誰に頼まれてやるのではないというような、平等で縛られない緩やかな活動がそういう場を生み出していくので、そういう枠作りや関係性のつくり方が重要ですね。

井上：スケールというと、すぐにより大きなものという方向に話がいくのだけれど、そうでなく、無数の小さな集団をミツバチのように媒介しながら、輪を広げていく。そんなイメージでしょうか。

若杉：僕は小さい集団がネットワークされていって、必要なインフラは共同で支えていくような集団のあり方が、社会を変えるリソースになり得ると思います。当然今までの組織の枠組みもあるんだけど、そういった主体性をもった新しい小さな集団が同時並行的に社会に存在して、どちらでも行き来できることでバランスが取れていくのではないかな。

井上：そうですね。僕らが今挑戦しようとしているのは、ビジョンやミッションを示して、それを浸透させることで組織全体を動かすという、上からシステムを変えるやり方でなく、この地域がこんなふうになったらいいなとか、こうありたいなという未来のイメージを引き出しながら、そこに皆が自発的に参加するようなやり方で地域を変えていくことはできないかということです。誰かのために手間暇を惜しまずにやるような幸せな体験の積み重ねの先にあるイメージをうまく未来をつくることにつなげられないかという挑戦です。

若杉：そうですね、最初はビジョンなんてなくて、共に誰かのために何かの場をつくっていくっていう集まりが広がっていく中で、次にこの地域をどうしていこうかっていう発展をしていくと思います。だから、ビジョンは先にあるのではなくて、徐々に形成されていく。ただ、集合体の育成や翻訳して伝えていく立場が必要で、そこにデザインが力を発揮できる気がしています。デザインは、どちらかというと最大公約数をとりまとめて翻訳するけど、そこからあぶれたものは逆に否定してしまう危険性もあるわけで、それが起こらないためにデザインはどうあるべきなのかはこれから実践していかなくちゃいけないです。翻訳者として美しい答えを出すのではなくて、最終的な答えを出すのはデザイナーではなく市民なのだから、デザインする範囲を半分だけにして空白を残す、というのもあり得るのかもしれません。

井上：デザインの前提となる文化の問題なのかもしれないとも感じています。ただ、その文化というのがきちんと受け継がれていないですよね。この前、沖縄県の竹富島に行って、長老格の人と話したんです。竹富島は生活の中心に祭りがあるような社会です。頻繁にある祭りの時は、全員が仕事を休んで参加する。でも、例えば宿をやっている若い世代にとって、祭りは稼ぎ時ですから、祭りには出ない。それを長老達は苦々しく思っている。そういう世代間のギャップが生まれています。なぜ祭りがそこまで大事かというと、水が乏しい島で、生きていくのが大変だったからだと言うんですよね。水がない。だから種を植えたら芽が出てくれと祈る。芽が出たら無事に育ってくれと祈る。そうやって一年中祈っていたと。それと、複数の島から来た人達が住み着いた島だったから、異なる出自の人々がいざこざを起こさずに力を合わせて生きるためにも祭りが必要だったと言うんです。そういう祭りの背後にあった切実さを若い世代は知らない。祭りの背景と機能を解き明かしてそれを現代にどう引き継ぐか考えないと、祭りは形骸化し、観光資源としてしか見られなくなっていくんです。

若杉：その通りです。その地域の街並みや風景、所作っていうのは、その地域の人が成し得た一つの形なわけですけど、その本質を我々はきちんと伝えてこなかった。それを理解してデザインしていくということが重要なんだろうなと思います。一つ一つの営みや、場のあり方に意図があり一つの形として調和していたはずなんです。私たちはその声にならない多様な音に調和して行きたきたはずなのですが、今や新しい現象や言葉や数字という大きな一つの方向性や力に予定調和して生きてきた。そしてその力に合わない沢山の人や秩序を排除してきたのだと思います。しかし社会は多様で多彩で大小に関係なく沢山の人達の役割で動いている、だから未来は、もう一度、沢山の人たちの多声の未来であるべきなのかもしれません。

Convivi Lab

自律協生スタジオでは、月に 1 度外部のゲストをお招きして研究会を開催しています。ゲストの講義のあとは、本学の学生も交えての懇親会で親睦を深めます。こちらはどなた様でもご参加可能です。ご参加を希望される方はお申し込み用 QR コードからご連絡ください。

- **場所 : 武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス**
- **参加費 : 無料（懇親会費別）**
- **参加方法 : 右の QR コードからお申し込みください**

Convivi Lab 申し込み用 QR コード
https://rcsc.musabi.ac.jp/contacts/

自律協生スタジオに関するお問合せ
自律協生スタジオの取り組みに関するニュース・お知らせは、Web サイトからご確認ください。
https://rcsc.musabi.ac.jp/convivi/

市ヶ谷キャンパスにおける活動紹介

武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパスでは、多様な社会連携・共創活動を行なっております。詳しくは下記の web サイトもご覧ください。

ソーシャルクリエイティブ研究所（RCSC）

激しい環境の変化や未来が予測しづらい現代が抱える課題を、企業、地域、行政、教育の壁を越え、領域横断的に取り組み、ビジョンとプロトタイプを研究提案していきます。
https://rcsc.musabi.ac.jp/

武蔵野美術大学実験区

アート、デザイン教育で養った「創造的思考力」を駆使して描いたビジョンを、クリエイティブとビジネスの手法を用いて社会実装するのが特徴の創業支援プログラムです。
https://jikkenku.musabi.ac.jp/

Co-Creation Space “Ma”

個人・法人を問わず利用可能なコワーキングスペースを運用すると共に、経験豊かなコーディネーターが常駐し、プロジェクトや起業・創業支援を行います。
https://ma.musabi.ac.jp/

ICHIGAYA INNO-VATION DAYS

自律協生スタジオ
CONVIVIAL DESIGN STUDIO

RCSC